

葉集を読む

松岡 隆子

牡丹のひとつらごとくに闇を解く

鈴木 富代

夜明け前の牡丹であろう。牡丹はひとつらごとくに闇を解くように花卉を展げていく。ゆつくりと夜が明け、新たな一日が始まる。牡丹が夕方には花卉をたたみ、朝になるとそれを展げるといふことを知ったのは虚子の牡丹の句について書かれた文を読んだ時である。虚子の〈一辯を仕舞ひ忘れて夕牡丹〉について稲畑汀子氏は、「牡丹は夕べに花卉をたたみ、朝になるとそれを展げるのが、日が経つとだんだん花卉が閉まらなくなり、間もなくほろと花卉を落とす。(後略)」と書いている。まだ私はその様子を見たことがない。一度見てみたいと思っている。

こそばゆい思ひ出ひとつ金魚草

三宅まどか

こそばゆい思ひ出とは一体どんな思ひ出なのか想像もつかないが、金魚草から辿っていくと幼い頃の思ひ出であろうか。思いがけないことで皆の前で褒められたことがあったの

かもしれない。はにかみながらもちよつと嬉しくて、風に揺れる金魚草がこそばゆい感じがして……、と勝手に想像してみた。三宅さんの句はいつも屈託なく自分の世界を詠っていて新鮮で愉しい。

昨日より声の大きな燕の子

西島 美晴

燕の巣に気付くのは概ね雛のにぎやかな声が聞こえるようになってからのことが多い。顔中を口にして競って餌をねだる雛の姿は愛らしい。昨日まで黄色い声で鳴いていた雛たちも今日は一段と大きな声で鳴いている。日々育っていく雛たち、子燕として巣立つ日も間もないことだろう。燕の子を守る西島さんの優しい眼差しが思われる。

草笛や遠き日の風吹いてきて

津村 節子

草笛を吹く。ふと兄の姿が目には浮かぶ。兄は草笛が上手だった。上手く吹けるようになるまで優しく教えてくれた。草笛の音が兄と一緒に吹いた音と重なる。草笛という和金田きみ子さんの〈草笛を上手に吹くは淋しけれ〉を思い出す。草笛の澄み切った音色はなぜかもの悲しい。郷愁の音色である。

祇王寺に降る雨しづか著我の花

高橋いほを

祇王寺は平清盛の寵愛した祇王・祇女とその母刀自と仏御前が隠遁した尼寺である。寵愛を失って清盛の館を追われる悲話は『平家物語』に語り継がれている。静かな雨が境内の青竹や青楓を濡らし苔に覆われた庭園の緑が美しい。作者は